HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	はじめに (preface)
Author(s)	井上, 紘一
Description	ポーランドのアイヌ研究者　ピウスツキの仕事 : 白老における記念碑の序幕に寄せて. 2013年10月20日. 北海道大学学術交流会館. 札幌市 主催：北海道ポーランド文化協会, 北海道大学スラブ研究センター. 共催：グローバルCOE プログラム「境界研究の拠点形成」. 協力 : 駐日ポーランド大使館, ポーランド広報文化センター
Relation	「ポーランドのアイヌ研究者　ピウスツキの仕事 : 白老における記念碑の序幕に寄せて」研究会報告集
Issue Date	2013-10-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53490
Type	conference paper
File Information	iv_intro.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

はじめに

ポーランド共和国文化・国民遺産省はこのほど、ブロニスワフ・ピウスツキのブロンズ胸像を白老のアイヌ民族博物館へ寄贈する。第一号記念碑は 1991 年 11 月 2 日にユジノ・サハリンスクのサハリン州郷土誌博物館に建立されているから、白老のそれは世界で二番目の壮挙である。白老での贈呈・除幕式は、ポーランドの B.ズドロイェフスキ文化・国民遺産相や C.コザチェフスキ駐日ポーランド大使らが列席して、来る 10 月 19 日にアイヌ民族博物館で挙行され、これにはピウスツキ家からも三名の「孫」[1] が出席する予定である。

翌 20 日には北大の学術交流会館講堂で記念セミナーが開催される。これは市民を対象とするセミナーであるから、関心を共有される皆さまには奮って御参加いただきたい。

ブロニスワフ・ピウスツキ（1866－1918）は、ロシア帝国に併合されていたリトワニアでポーランド貴族の家系に生まれた卓越する文化人類学者である。サンクト・ペテルブルグ帝大法科一年生だった 1887 年、ロシア皇帝暗殺未遂事件に連座してサハリン島へ流刑となり、爾来 19 年間、ロシア領極東で過ごすことを強いられた。その間、北東アジア原住民研究に従事して、この分野では先駆的な研究成果を残したが、1906 年のヨーロッパ帰還後も不遇で、膨大な成果の整理・公刊を果たすことなく、第一次世界大戦下のパリで客死する。年子の実弟ユゼフ・ピウスツキ（後のポーランド共和国初代元帥、国家首席）が亡国ポーランドを再興する半年前のことであった。

ピウスツキ没後ほぼ一世紀が経過したが、なかんずく 1970 年代以降、彼の生涯や仕事の掘起こしがポーランド、ロシア、日本などで進められた結果、ピウスツキは今や北東アジア原住民研究の魁として、揺るぎない地位を占めるに至った。彼の仕事では、1912 年に上梓された著書『アイヌの言語・フォークロア研究資料』（クラクフ：ポーランド学芸アカデミー）が名著として夙に著名であるが、アイヌのほかにニヴフ（ギリヤーク）、ウイルタ（オロッコ）、ウリチ（オルチャ）、ナーナイ（ゴリド）の言語・フォークロア研究にも、当時の最新機器であった蠟管蓄音機やカメラを駆使して携わり、やはり先駆的成果を残している。これら既刊・未刊の研究業績は、1998 年から刊行が始まった A.F.マイェヴィチ編『ブロニスワフ・ピウスツキ著作集』（全 5 巻、ムトン・デ・グロイター社、4 巻までが既刊）に、すべて収録される予定である。

ピウスツキの学術遺産に新たな光が当てられる契機となったのは、1979 年春の札幌におけるピウスツキ業績復元評価委員会(CRAP)の発足である。同委員会（のちに ICRAP）は、ポーランドで発見されたピウスツキ採録の録音蠟管を日本へ借り出し、最先端の科学技術を駆使して音声再生作業を進めるとともに、散逸した研究業績を博捜して然るべく評価し、併せて彼の伝記資料も収集した。

その成果は 1985 年に札幌で行われた第一回ピウスツキ国際シンポジウムで報告された。その後 1991 年には第二回シンポジウムがサハリンのユジノ・サハリンスク、第三回は 1999 年

[1] ブロニスワフ・ピウスツキの孫で、ピウスツキ家嫡嗣の木村和保氏、実弟ユゼフ・ピウスツキの孫で、ユゼフ・ピウスツキ博物館長のクシシュトフ・ヤラチェフスキ氏、および末妹ルドヴィカの孫で、ブロニスワフの伝記研究にも携わる作家のヴィトルト・コヴァルスキ氏。

にポーランドのクラクフ、ザコパネと、いずれもピウスツキに所縁の地で開催されている。2010 年には澤田和彦・井上紘一編『ブロニスワフ・ピウスツキ評伝』（全 2 巻、埼玉大学教養学部刊）が上梓された。

ところで、日本はブロニスワフ・ピウスツキと浅からぬ縁で結ばれている。彼は 1902 年から 1906 年にかけて四度訪日するが、なかんずく 1903 年の第二回来日は北海道に三ヵ月、1906 年の第四回では東京と長崎を中心に七ヵ月半と、かなりな長逗留であった。北海道では、ポーランド人シェロシェフスキの北海道アイヌ調査にアイヌ専門家として参加、函館と白老に各一ヵ月、平取に一週間余り、札幌に数日間滞在したが、とりわけ白老ではアイヌ・コタンに住みついて、コタンの人たちと胸襟を開いて付き合ったことが知られている。ヨーロッパへ戻る途上に立ち寄った第四回来日では、政治家・文学者・アイヌ研究者・社会主義者・女権活動家・女流音楽家など多士済々の日本人のみならず、亡命ロシア人や中国人革命家とも交際を重ねた事実が判明している。なかでも二葉亭四迷との厚い友情は特筆に値する。ピウスツキのアイヌ研究処女作（「樺太アイヌの状態」『世界』26、27 号所収、1906）は、東京の京華日報社が発行する月刊誌に日本語で発表されている。

加えて、ブロニスワフ・ピウスツキは 1903 年 9 月、南樺太東海岸のアイ・コタンでアイヌ女性チュフサンマと結婚し、助造・キヨの二児をもうけたが、妻子は彼のヨーロッパ帰還後も樺太に留まる。遺児は太平洋戦争後に北海道へ移住し、兄は富良野町、妹は大樹町でそれぞれ一家を構えた。今は孫や曾孫の世代になったとはいえ、ブロニスワフの末裔は全員が日本人として日本に在住する。因みに、長男助造の長男である木村和保氏は、当代ピウスツキ家の正統な当主である。氏は 1999 年のポーランド初訪問を機に、ポーランド在住の親族と親戚付合いを始めて、なかんずくユゼフ・ピウスツキの孫娘一家とは家族ぐるみで往来を重ねておられる。

今般のピウスツキ顕彰事業の発端は、ポーランド大使館が着想されたピウスツキ記念碑の寄贈計画であった。2010 年 8 月には大使の発案で記念碑寄贈と学術集会の双方を推進する実行委員会が発足する。大使の交代で実行委員会は「縁の下の力持ち」に甘んじることとなるが、実行委員各位にはこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。顕彰事業の実現に至る 3 年間には、多方面の方々から御支援・御鞭撻を賜った。なかんずく事業資金の提供を賜るポーランドの文化・国民遺産省、ポーランド大使館、ポーランド広報文化センター、グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」、そして記念セミナーを主催してくださる北海道ポーランド文化協会と北大スラブ研究センターには、特段の深謝をここに銘記する次第である。

2013 年 9 月 20 日

ブロニスワフ・ピウスツキ顕彰事業
実行委員会
発起人・世話役
井上 紘一